

もくじ

昭和二十五年頃の東洲江小学校	1	1P
行政文書に見る足立区の水害記録 (二)	2P	「戦国足立の三国志」 3P



東洲江小学校周辺 (昭和28年航空写真)

「カーン、カーン、カーン」東洲江小学校の始業です。学校内に放送設備があるわけではない昭和二十五年(二九五〇)には、代表の先生が今で言う「ハンドベ

ル」を鳴らしながら学校内に始業を伝え回りました。昭和二十五年頃の東洲江小学校のある地区は、戦後の周辺地域の宅地開発が進み、日立製作所の亀有工場等に人が集まり人口増加は目覚ましい

# 足立史談

## 第613号

2019年3月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(30-309)

### 昭和二十五年頃の東洲江小学校一

渡邊梅子

ものがありません。大戦中の昭和十七(一九四二)年には学級数二十五、生徒児童数一五二八名だったのに対して昭和二十五年には生徒児童数が二六七七名に達していました。この生徒数を受け入れたのが、明治四十四年(一九一七)年に東洲江尋常国民学校として開設された、私が初めて教壇に立つ東洲江小学校だったのです。(次頁参照)

申し遅れましたが、私は、現在豊島区在住の今年で九〇歳になります。渡邊梅子です。これからご紹介するエピソードは、古き良き時代のとてもおもしろいお話です。今では、すぐにニュースになってしまいそうな出来事も出てきますが、昔を懐かしみながらお付き合いいただければと思います。

私は、昭和二十五年に日本大学を卒業し、高校と中学の社会・国語科の免許状を取得しました。この頃の教員免許状には、連合国最高司令官総司令部(所謂、GHQ)のお墨付きも記載してありました。教員として考え方に問題がないことを与える意味があったのかもしれないが、二〇代の私には、GHQのお墨付きよりも教員になれたうれしさで自分が教壇に立った時を想像して不思議な高揚感を感じていたことを思い出します。ただ、この年には、私の期待は淡く消えてしまいそうな状況

で、東京にはほとんど就職口がなく、私は家付き娘ゆえ地方に行くことはできませんでした。そんな折、両親が同郷であったご縁もあり、近所で親しくお付き合いをさせていただいた方のお力添え(今では、あまり聞かなくなりました)縁故採用かもしれません)で東洲江小学校に奉職できることになりました。小学校の免許が無い私が、どうして小学校教員になれたかですか?その当時は、仮免許制度(自動車みたくですね)があり、三年間の実績を積んで認められれば本免許が取れた時代なのです。時代もよかったですし、近所に住まわっていたこの同郷の先生との巡り合いがなければ、教職(今では天職だ)と感じていません。(を三〇年も続けられなかったと思っています。人とのつながりは、どんな時も不思議な縁があり大事にしなければいけないと感じています。

時代は、終戦の五年後で「復興」と「増産」が巷にあふれていました。就職口を見つけないのに苦労し、社会の仕組みも人間関係の何もわからぬ二十歳一歳が、三十三歳まで(昭和三七年)東洲江小学校での教員生活を始めることになりました。

#### 【通勤】

通勤は、自宅のある池袋から二つ目の東長崎駅から池袋まで西武線を使い、環状線(今の山手線)を日暮

里で常磐線に乗り換えて、亀有に向かいます。常磐線の北千住を過ぎると、街並みの様子が一変して、本当に見渡す限りの田んぼでした。特に、亀有駅の周りには何もなく、広場だけがあつたように思います。駅の左手に金物屋さんがあつて右手に岡田新衛門宅の大きな屋敷林があつただけを覚えていきます。

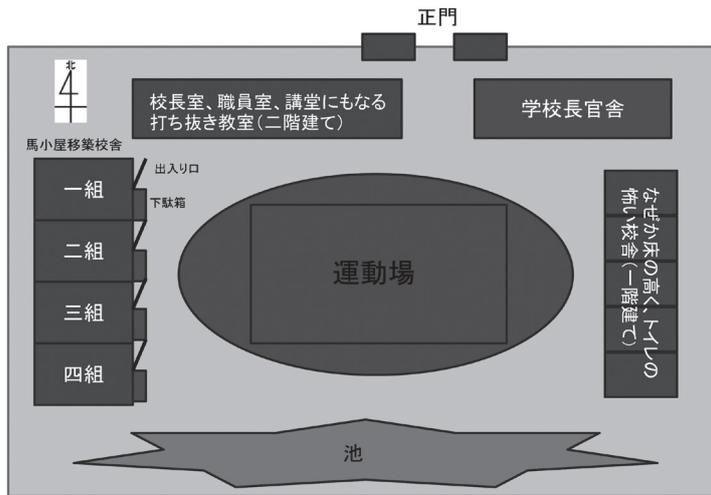
亀有駅から、東洲江小学校までは、直線距離にすると一キロメートルと少して、徒歩で十五分程度でした。駅前からは、今と違って何もありませんから、学校の校舎を遠くに確認できたように思い出されます。通勤経路は、亀有駅を北に向かって農業用の用水路を左手に見ながら大谷田橋で左に曲がるルートでした。この場所は昭和三十五年に、飯塚橋（大谷田橋の東側）が開通すると、大谷田橋の交通量が増え、通学の子供たちを交通事故から守るために先生方が週番で見守りが始まりました。まだ、集団登校はなかつたので、先生方は大谷田橋と東洲江小の正門前の両方で通学時間帯の見守りを行うようになりしました。大谷田橋にあつた火の見櫓を左に曲がり、週番の先生に挨拶すれば、東洲江小学校の正門はもうすぐです。

帰宅する時は、学校の周りに民家もまばらで、夜は街灯も十分になく夜の暗さは覚えていますが、若さの

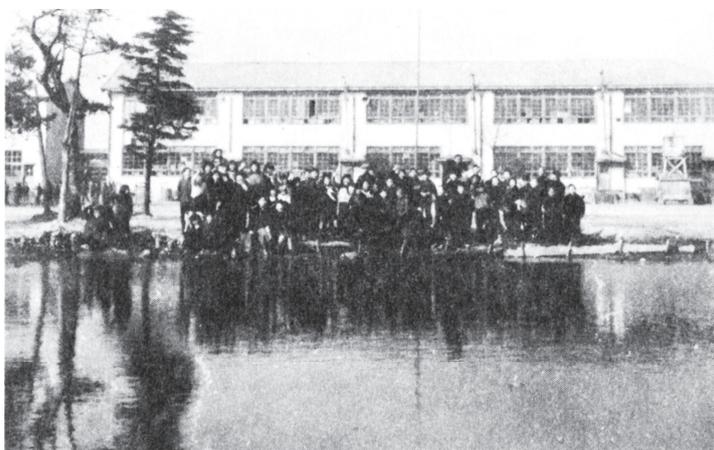
せいでしょうか、特に寂しさも気になりませんでした。

【学校の様子】

用水路を左に曲がると小学校の校門が見えてきます。校門を入ると右側に昇降口があり、左手には学校長官舎がありました。この官舎に校長先生が住まわれているわけではなく、今では聞かなくなった学校の用務員さん（「小使いさん」と呼んでいました）が住まわれていました。



昭和25年ごろの校舎の見取り図



昭和29年の写真  
『東洲江小学校70周年記念』より

用務員さんは、教育備品の修繕から学校行事の必要備品の買い出しまで、時には近所の農家から先生方が頂いた野菜の漬物作りまで様々な雑用をこなしてくれて、たいへん助かったように覚えています。

官舎の奥に、校舎として使っていた古い建物がありました。この校舎は、石積みの上に木造の校舎を乗せた構造で、床が高いことが特徴でした。その構造から、特に印象

に残っているのは、教員生徒共用のトイレです。水洗式ではありませんでしたので用を足す際、奈落の底を思わせる深さに、いつも恐る恐る使用していたのを覚えています。

生徒数が多かつたせいで、この年（昭和二十五年）には分校（大谷田小学校）が開校されるのですが、それまでも限られた教室で大人数の生徒に授業を行うわけですから、一回の授業では対応できず、二部制の授業を行っていました。午前と午後のクラスの二部制です。午後のクラスに指名された子供たちは、午前中は遊びほうけて、午後の授業を待ちます。午後のクラスの子供たちは、まさに時を忘れて遊びますので、遅刻が心配でした。でも、その心配は杞憂でした。子供たちのカバン（ランドセルもあつたようです）には「午後クラス」を意味する表示（印）がありました。今のように個人情報があるささい時代では、考えられませんが、周りの大人たちは、この印をみて子供たちを午後のクラスに送り出していたのでした。

私が最初に任されたクラスは、四年四組でした。四年生の教室は学校の西側にあり、軍の馬小屋を移築したとのことでした。馬小屋ですから、天井板は無く、教室の上を見上げればハリが見えてしまいます。四年生の元氣盛な級の子は、時にハリの途

中へのぼり、私を見下ろしたりしていました。床板は、隙間だらけでエンピツ、消しゴム等を机から落とすと、床板から落ちてみつからなくなってしまうました。充分な学用品が無かった時代ですから、机から何かを落とした時には、クラスが大騒ぎだったのを覚えています。

また、移築の校舎ですから、廊下などはなく、クラスが独立しているといえは聞こえはいいのですが、各クラスに個別の出入り口があり、下駄箱は教室の窓の外にありました。子供たちは洒落たスニーカーではなく、下駄を履いて登校していましたので雨の日には汚れた足をクラスの出入り口にあった雨戸井からあふれ出た雨水で洗って教室に上がってきっていました。

当時は、教育に必要とされている児童心理及び教育の技術について充分な知識を持たずに教員になった私（他の先生は、違います）です。で、授業は単調になり、この漢字はこう読むの、掛け算は九九を使つてこうするの、と今考えれば、かなりメリハリの無い授業になってしまいました。

子供たちは、面白いわげがなく、授業中はおとなしくしているはずもなく、私は毎日怒ってばかりでした。でも、私のクラスのご父兄の皆さまは、全幅の信頼を寄せてくださり、

私のことは一切怒らずに、かえって「お前が悪い」と子供たちを叱つてくださいました。モンスターペアレントという言葉は、この当時は考えられませんでした。

はじめての級のご父兄の皆さまから信頼されたことで、自分に自信が生まれ、教職を天職と考えられるようになり一生の仕事として教員でいられたことを、ご父兄の皆さまに感謝しています。本当にありがとうございました。

（つづく）  
元東瀧江小学校教員



### ■明治四〇年の水害記録

具体的に『明治四十年起 出水書類 南足立郡役所』の内容を見ていきます。最初に、明治四〇年の水害記録について。

#### ■千住河原の渡船

四〇年の水害書類には、最初に渡船開始の原議があります。これは八月二十五日午前八時に千住河原往還（中組河原原）が「…一面汎濫シ、激流脚ヲ没シ、通行危険…」なため渡船を開始すると南足立郡役所から東京府に報告されています。この「千住河原」という場所は、現在の千住

河原町と橋戸町あたりで、江戸時代以来、掃守堤の堤外地として荒川（隅田川）の汎濫地（現在で言えば河川敷のようなところ）となっていたところ。汎濫地となっていたため沼沢地（低湿地）で、茅場のようなところもあり、そこに日光街道という大交通網が通っていたという状況です。通行する人も多かったです。大雨なら渡船が必要になるわけです。しかし、同日の午後九時には千住大橋際の水量が増水して渡船が危険なため中止されています。減水してきたため安全と認められ、渡船が再開されるのは二十九日午後一時、

水が引いて渡船の必要がなくなり渡船が停止されるのが九月一日午後八時です。このような千住中組河原での渡船の実施は、四十三年の水害の際にもありました。ただし、四十三年には、前年四月にこの沼沢地に架けられた「新開橋」という長さ五十五m幅八mほどの橋がありました。ところが、この橋が四十三年の水害で流失してしまいます（四十三年八月十五日に流失）。そこでこの時も渡船が行われる事となったわけです（開始は八月十七日以降）。新開橋は一年数ヶ月だけ存在した短命な橋ということになります。この『出水書類』の中には新開橋が流失した記載がありません。架橋時には渡り初めをして、記念写真まで撮影した「大

橋」（南足立郡では、千住大橋に次ぐ大橋でした）なのに、なぜ記載がないのか、その後の渡船の記載はあ

#### ■堤防防禦のための援助

八月二十六日には、荒川・綾瀬川の堤防防禦のための人夫を差し出すようにとの通牒が郡役所から舎人村・梅島村・淵江村・伊興村に出されています。本来、この四村は荒川・綾瀬川とはほとんど接合していないので堤防の防禦を行う必要はないと思われま

しかし、「…地先町村ノ力ニ及ハサル旨、両川堤塘水防組合管理者ヨリ特ニ申出候条、左記ノ方法ニ依リ至急人夫其他差出有之度」ということで援助するよう郡役所から求められています。「両川堤塘水防組合」という、いかにも近代的名前の河川水害対策の組織が明治期の足立という地域に存在していたということ、それがどのような組織でどんな活動をしていたのか、興味をそそられます。各村の援助の内容は、舎人村が江北村地内の荒川堤に人夫五十人、明俵百枚、梅島村が千住地内の綾瀬川堤と荒川堤に人夫各二十五人、明俵各百枚、淵江村が綾瀬川堤に人夫五十人、明俵二百枚、伊興村が千住地内の荒川堤に人夫二十五人と明俵百枚、ほかに各村で鋤と鍬など持参となっています。他町村に比べて少ないとはいえ、それ

それぞれの村でも水害の被害はありまし  
たから(梅島村が浸水戸数五三三五戸、  
救助見込人数四九〇人で四村の中で  
はもっとも被害が大きかった)、そ  
のような状況の中で、ある程度まと  
まった人数を援助として提供するこ  
とは、手配が大変だったのではない  
かと思えます。この郡役所の通牒に  
対して各村がどのように対応したの  
かという返牒は残っていませんが、  
同じ簿冊の中の「明治四十年八月廿  
四日 荒川出水々量調 附日誌」の  
日誌部分の八月二十六日の条に「梅  
島・淵江・伊興等綾瀬堤防二助力ス  
舎人ハ江北へ助力ス」とあるので、  
実際に援助したことがわかります。  
また、この援助活動は、江北村長  
からの次項のような報告を受けてな  
されています。

■江北村長からの荒川堤の決壊通報

江北村長から、「荒川堤防警戒事  
項報告」が郡長あてに二十六日出  
されています。その内容は、同日午  
後三時三〇分に柳村(現在の川口市  
南部のうち芝川東部地域)から堤防  
が洪水で危険なため援助を求められ  
たので出向いたところ、既に辻村(柳  
村の北部、現在の川口市坂下町附近)  
で芝川の堤防が数か所で決壊し、目  
的である十二月田(しわすだ)村

(現在の川口市朝日・末広附近)を  
防禦できないので帰村して村の警戒  
にあたっていたが、この報せを聞き

て「水害救助施行中ノ雇人員ハ、各  
自ノ警戒上逃走シタリ」。そこで人  
員を徴発しながら、明朝まで準備を  
怠らずに警戒・救助をできるように  
する覚悟だ、というものです。埼玉  
県と東京府と近代行政区画では自治  
体を別にしていますが、江戸時代以  
来の地続きの互助的関係は生きてい  
て、この水害ではそれが発揮された  
ようです。

江北村長の報告を受けて郡内各町  
村に、警戒するようにという通牒が  
郡役所から発せられました。芝川は、  
荒川に注ぐ川ですが、荒川が増水す  
ると川水が逆流し、氾濫することが  
多かった川です(現在は放水路であ  
る新芝川ができて汎濫はなくなりま  
した)。また、「水害救助施行中ノ雇  
人員」ということはボランティアで  
はなく、「金銭で雇われた」とい  
うことで、そのため「各自ノ警戒上  
逃走シタリ」(自宅の警戒のために  
逃げ帰った)ということが発生した  
のでしよう。村と村の間で困難時は  
助け合うという習慣があったことは  
すばらしいですが、現在のボランテ  
ィア活動とは違い、自らも水害にさ  
らされている状況では、善意でボラ  
ンティアに行くことはなかなかでき  
ないような事情がうかがえます。

(当館専門員)

企画展 戦国足立の三国志  
宮城氏・舎人氏・武蔵千葉氏

キャラクター登場!

3月19日から5月6日まで  
足立の二世を取り上げるこの  
展示では、現在の地名でも馴染  
みの深い、区内で活躍した三氏  
の動向を、貴重な古文書から読  
み解きます。

今回は、三武将のイメージを  
キャラクター化し、ポスターに  
登場させたほか、それぞれのミ  
ニキャラが、展示室内でご案内  
をしています。

キャラクターデザイナーは  
deco先生。イラストレーター・  
漫画家として活躍中です。担

当者の伝えた情報をもとに、親しみ  
やすいキャラクターを生み出して  
いただきました。  
三武将も展示室でお待ちしてい  
ます！ぜひご来館下さい。



とねりまごしろう  
舎人孫四郎  
主君の窮地を救った義勇  
のあるイメージで。  
舎人氏  
北条氏に敗れ、舎人は宮  
城氏の領地になった。居  
城の跡が「見沼代親水公園  
駅」付近にうかがわれる。



みやぎしろうひょうえ  
宮城四郎兵衛  
行政的なこともこなした  
伶俐なイメージで。  
宮城氏  
宮城の土地とは離れてし  
まったが、旗本となって  
幕末を迎えた。



ちばもりたね  
千葉守胤  
平氏の流れをひく名族  
で、和歌にも秀でた雅な  
イメージで。  
武蔵千葉氏  
北条方について秀吉に滅  
ぼされたが、区内には武  
蔵千葉氏との縁を名乗る  
旧家も多い。